青空

村山

「ピピピッ！！　ピピピッ！！　ピピピッ！！　ピピピッ！！　ピッ！」
午前八時。目覚まし時計が鳴り起床。窓を開ける。本日快晴なり。
午前九時。朝飯にパンとすこしこげたハムエッグを食べる。それなりにはうまい。
午前九時半。テレビをつける。何とはなしにワイドショーでも眺める。

まったくいつもと同じ日常驀進中。あきらめにも似た溜息が洩れる。
同じように目を覚まし、同じように朝飯を食べる。全くくだらない生活だ。
どうしても変えることはできないこの日常。
くだらない日常は常に俺に付きまとう。俺がこの世界にいる意味はあるのか。
どうしてこんなことになってしまったのだろうか？
さぁわからないな。俺が悪いんだろう。でもどうすればいいんだろうか。
いつからこんなことになってしまったのだろうか？
そんなこともうとっくに忘れてしまった。くそっ！
夏休みは特につらい。こんなことを考えなくてはならない。
学校ならば、流されるままに授業を受け、そのまま床につける。とても気楽な日々だ。
ふとテレビに視線を戻す。
テレビもいつも通りくだらないニュースを流しているようだ。
誰がどこで殺されたとか、公務員の不祥事とか、詐欺が云々とか。
代り映えのないニュースの数々。俺には知ったこっちゃないね。
俺に関わりがあるわけでもなしに。奴らは暇つぶしにニュースを流してるのか？
ワイドショーは次第に明るい話題へと移り変わり、アンニュイトークをし始めた。
どっかの動物園からライオンの赤ちゃんを連れてきたそうだ。かわいいね。
ああ、このぬるい感じは嫌いではない。夏休みの気だるい感じと相まって最高にいい気持ちだ。
「ふぁーあぁー」
眠たくなってくる。今日もどうせつまらない日常が続くのだ。寝ても支障はない。
瞼が重い。テレビの皆さん、ごめんなさいね。つけっぱなしのテレビに挨拶をして目を閉じた。

少女が扇子を華麗に翻し踊っている。黒くてやや長めの髪が足を動かす度に揺らぐ。
その足どりは軽やかで、でもしっかりとしていた。

板張りの広い部屋に一人。その広さに負けることはなく彼女は踊り続ける。
日本舞踊というのだろうか……素直にとても綺麗だと思った。
次第に首筋に汗が湧きでて、その伝う汗も魅力的で何もかも完璧だった。
やがて踊ることをやめ、白いタオルに手をとりその汗を拭う。練習だったのだろうか。
彼女は柔らかい笑みを浮かべ俺に近づき手を伸ばす。
その細く白いその腕は……とにかく綺麗としかいいようがなかった。

目を覚ますと、時計は昼の十一時を指していた。
夢から覚めても、夢の女性の姿が目に焼きついて離れない。
扇子を持って華麗に踊るその少女の光景は、夢なのに明確で夢とは思えないほどだ。
とても不思議な感覚。このくだらない日常が一気に華やいだ。
彼女に会いたいと思った。といっても夢の中の話で、この世界に彼女はいないかも知れない。でももうこれしかないんだ。
どうせ今日もくだらない毎日が続くのだ。ただ今日は外にでるだけさ。
京都にでも行くか、日本舞踏といえば京都だろう。
気分がすごく高揚している。気持ち悪いほどだ。
俺は夢にすがり、玄関のドアを開けた。

ギリギリで電車に滑り込み、京都へ向かう。三十分くらいの旅だ。そう遠くはない。
電車の中の風景も変わり映えのなく。競馬場に行くだろうおっさんや部活終りの高校生やらが陣取っている。
その光景はどこか嘘っぽくて俺に立体映像を眺めているような錯覚を覚えさせる。
今ここでナイフなんかを振り回せば、変わり映えのある風景を見ることができるだろうか。
でもそうでも無いかも知れないな。最近のドラマにはそんな描写は当たり前で見慣れてしまっているからな。
まったくくだらない日常だな。ふぅー。
じゃあだ。俺のくだらなくない日常ってなんだろうか？
得異なことが起こればいいのか。それで俺は満足なのか。
俺は何を求めているんだ。夢の踊り子に会えたら何か解決するのか。イライラしてきた。
じゃあどうすればいいんだよ。唇を強く噛みしめる。ちっ痛い。
「ハッ……クシュン！！　あっすいません。」
隣の野郎が大きなクシャミをしやがった。全く迷惑なもんだ。
あー何を考えていたんだっけ。ああそうだったな。もう考えるのはやめよう気が滅入る。
外に目を移すと雨が降っていた。京都は雨か。運が悪いな俺は。

そんなことを考えていると、四条駅に到着した。
幸いなことに京都では雨が上がっていた。まだ独特の嫌な臭いがする。
空も重く灰色で、また雨が降らないことを祈ろう。
にしても、こんな日でも京都は人が多い。観光客もたくさん来ているのだろう。

京都の通りを歩く。
さてさてここまで来たものの何をすればいいのか見当がつかない。
四条通を歩けどもあるのはお洒落な店ばかりで俺は何しにここに来たんだろう。
依然俺の行くべきところは見つからない。適当に信号を渡りなおも歩く。
仮に彼女に会えたところで俺は何をするんだ。
考えるべきことは無数にある。まだまだ考えなくちゃならない。
俺はどうしたいだ？もしも彼女会えれば何か変わるのか？
何に不満を持って、何をどうすれば、何の解決になるんだろう。
何もかもわからなくなってきた。
俺は何をすべきか？
俺は何が欲しい？
俺は何が不満なんだよ。
本当に俺はどうしたいんだろうか？

自動販売機でコーラを買い、京都の町を歩く。
俺は何のためにここに来たんだ。
夢の少女を追いかけて、馬鹿みたいだ。なんて格好悪いんだろう。
これだったらば、家でくだらない日常を満喫してる方がまだましだ。
俺はコーラを一気に飲み干して、邪魔になった空き缶を弄ぶ。わずかに残っていたコーラが手にかかる。もう最悪だ。
今日はさっさと家に帰るか。何の収穫もなしだ。糞ったれ！
結局彼女には会えなかった。会ったところで何か変わるわけでもない。
もうそんな希望を持つことすらも叶わないのだろうか。
その時、女性が俺の隣を通った。
栗色の髪が揺れて、彼女の笑顔はこの曇りの空にでも輝いていた。
明るい色の服は彼女の魅力を引き出し、その大人っぽい風貌がとても魅力的だった。
彼女の香水が俺の鼻を撫でた。
そしてその時気づいた。
夢の踊り子は確かに美しい。でもそれは夢の話だ。
現実の女性は確かにそこにあって、俺の考える以上の魅力があって、惚れたとか好きに

なったとかじゃなくて。
なんというか、とても現実味があって人感じたというか。
俺はなんて馬鹿なんだろう。現実逃避もいいところだ。
その香水の匂いは俺の虚無色の空を晴れさせた。
俺はポケットから携帯電話を取り出し友人へ電話をかける。

「もしもし」
「川崎どうした？　お前が電話かけてくるなんて珍しいな」
「おう、今からお前んち行っていいか？」
「えっまっいいけど。なんでだ？」
「後、女の子紹介しろ！！」
一方的にそういって電話をきった。